



大阪府済生会千里病院 地域支援センター 地域医療連絡室だより

編集・発行
済生会千里病院 地域支援センター
地域医療連絡室
〒565-0862
吹田市津雲台 1-1-6
TEL 0120-115-031 (登録医専用)
FAX 06-6871-5915

(財) 日本医療機能評価機構による病院機能評価 (Ver.5.0)

認定病院になりました。

千里病院は、財団法人日本医療機能評価機構による病院機能評価 (Ver.5.0) を受審し、書類審査・訪問審査の結果、2008年6月16日付けで認定病院となりました。

日本医療機能評価機構は、患者さんが適切な医療を安心して受けられるよう、医療機関の機能を学術的観点から中立的な立場で評価し、その結果明らかとなった問題点の改善を支援する第三者機関として設立されました。

以下の6つの領域について、それぞれの専門的な見地から中立的・客観的な判断・評価が行われ、認定基準を達成していると判断された場合に認定証が発行されます。

評価対象項目

1. 病院組織の運営と地域における役割
2. 患者の権利と安全確保の体制
3. 療養環境と患者サービス
4. 医療提供の組織と運営
5. 医療の質と安全のためのケアプロセス
6. 病院運営管理の合理性



第三者による中立的・客観的な審査に、職員一丸となり対応！

《認証までの経緯》

- 2005年 8月 品質管理室設置
- 2006年 1月 第1回自己評価調査実施
- 2006年 8月 院長の「キックオフ宣言」
全職員対象の説明会開催
- 2007年 1月 第2回自己評価調査実施
- 2007年 7月 第3回自己評価調査実施 (訪問支援用)
- 2007年 10月 訪問受審支援実施
- 2007年 12月 内部監査実施
- 2008年 1月 シミュレーション実施
- 2008年 2月7日、8日、9日 訪問審査実施
- 2008年 7月12日 認定証受領 (2008年6月16日付け)



合同面接のようす



訪問審査のようす

審査結果は、日本医療機能評価機構のホームページ“認定病院一覧”にも掲載されます。<http://jcqhc.or.jp/html/index.htm>

第三者による病院機能評価を受審することで、改善すべき点をより客観的に把握できることで、効果的な医療サービスの向上につなげることができます。今回、(財)日本医療機能評価機構によって認定を受けたことにより、千里病院の医療の質が一定水準であるということが認定されました。これからも、「心のこもった医療」を患者さんのために、地域のために、心をこめて最高最適の医療の提供を目指し改善活動を継続してまいります。

四川大地震 体験談



平成 20 年 5 月 12 日、現地時間午後 2 時 28 分、四川省汶川県でマグニチュード 8.0 の地震が発生、死傷者、行方不明者数は甚大であるという情報でしたが当初中国側からの救助隊および医療班の派遣要請はありませんでした。しかし 5/15 中国側が救助隊の受入れを承認、同日夕方日本緊急援助隊救助班が成都へ向け出発、現地での活動を開始し、私達医療班（医師 4 名を含む計 23 名）は 5/20 成田空港から成都へ向け出発しました。

私は 2005 年パキスタン地震の時にも緊急援助隊医療班として派遣された経験がありましたのでその時の状況を思い浮かべて成都に降り立ちました。当時は山間部の崩落した町に日本の医療テントを張りそこで各国の援助隊等と協力しながら救援活動を行いました。したがって今回も中国側からそういった被災地での活動を要請されているものだと思い込んでいました。

しかし中国側（正確には四川省側）は当初 500 床ほどの四川人民第一病院での活動を要請してきました。被災国の要求があればそれに答えるのが援助隊の役割とは全員認識はしていましたがあまりにも患者も少なく日本側としては別の病院を紹介して欲しい旨を伝えました。これで活動開始が一日延びてしまうことになってしまいました。日本国内でもこのことに対しては賛否両論があったことと思います。なぜ要請を断ったのか、早く活動を開始しろ云々。でも僕たちとしても苦渋の決断だったのです。

次に紹介された華西病院（紹介してもらえぬまですぐ時間がかかりました。ベッド数 4300 床、ICU120 床等々の世界一の規模を誇る病院です）で活動することになったのですが…。22 日午前中に病院側と折衝がありました。しかしこの時も病院側から伝えられたのは被災地から患者は集まってきているが医療従事者の数は中国各地から応援が来ているので充たされている。日本側の医療行為を求めているのではなく医療知識・経験が欲しいといったものでした。日本側は手術室での活動、整形外科病棟での活動等を提示したのですが、上記した通り充たされているということで要求は通りませんでした。しかし冷静に考えてみれば、相手がどの程度の医療技術や知識を持った人間が集まって来ているかわからない段階で「じゃあ手術室で外傷の手術をしてください、救急外来で外傷の治療にあたってください」とは簡単に言うわけにはいかないでしょう。ということで僕たちとしては日本側がこんな技術・知識を持った集団ですよということを病院側にまず理解し

てもらいそれから活動範囲を広げてもらおうという判断になり 22 日午後から活動が開始になりました。

この華西病院がある成都という街について簡単に説明しますと、人口は 1300 万人で被災地から車で約 1 時間ほど南へ走ったところにあります。街並みを見ると高層ビルが立ち並び中国の経済発達を目の当たりにすることができます。被災して倒壊した建物は周りを見渡しても見つけることが出来ません。食料に困ることもありませんでした。ですから被災国の援助に来たと言っても被災地を見ることもかなわず、ましてや被災地での医療活動もできないという状況に置かれてしまったわけです。ですから実際活動が開始になっても医師の立場の 4 人は日々葛藤を繰り返していました。ある者はニーズが無いなら活動を中止し帰国も止む無し、ある者は被災地へ入っての活動をするべきだ、いやいやこのままこの病院で活動を続けていくことが大切だなどと意見をぶつけ合う毎日でした。さらにはドイツ、イタリア、ロシアから医療班が中国に入り被災地での活動を開始しているといった情報が入ってくるわけです。どうして日本は認めてもらえないのか！といった感情も芽生えてきていました。しかしこういった議論を繰り返した結果「この病院で最後の最後まで活動をしていこう。必ず日本からきていることが中国の国民には伝わるはずであるしそのことが一番大切だから」との空気が芽生えてきました。その後は救急外来、透析室、ICU、産科病棟、薬局、レントゲン室などで活動を継続、治療法の意見交換や勉強会を開催し活動を終え 6/2 帰国の途に着きました。

今回の派遣は何名患者を診察したというような成果は挙げることはできなかったと思っています。しかし帰国する時には日本のテントには数多くの現地の人々が訪れてくれました。ある朝、テントへ行くと中国の方からの寄せ書きがさりげなく掲げてあったということもありました。患者様は泣いて喜んでくれる方も多かったです。四川は日中戦争の面影が強く残る街です。そんな場所へ日本からの援助隊が入って活動をし、中国国民の方々に受け入れてもらえたということが一番の成果であったと思っています。これを書いているころ東北で震度 6 強の地震がありました。この時中国国内で「今度は中国が日本へ援助隊を送る番だ」といった声が多く挙がっていると聞きました。こういったことを聞いてもいい活動ができたのかなと考えています。まだまだ書きたいことは山ほどありますが紙面の都合上これぐらいにしたいと思います。日本からの応援ありがとうございました。

